

劇団☆新感線公演 夢見る無法者

1986年4月12日〜13日 扇町ミュージアムスクエア

キャスト

野蛮大……………橋本じゅん
伊達英介……………古田新太
大貫愛……………ちーばつば小徹
山本山紀子……………鳳ルミ
山本山山……………中本いちろう太
栗田淳二……………栗根まこと
紅科セイ……………西田フミ
大貫文左工門……………竹田団吾
逆巻弦之丞……………逆木圭一郎
MIRKA……………前田ミカ
HIRROMI……………桜井ひろみ
木島昭彦……………枯暮修
ジューダス猪上……………猪上秀徳

スタッフ

作……………中島かずき
演出……………いのうえひでのり
舞台監督……………西本修
照明……………森和雄
音効……………広瀬よしあき
P・A……………スタッフステーション
衣裳……………美紀子
◇……………照元ルミ子
小道具……………竹田団吾
◇……………逆木圭一郎
殺陣……………中川こうぞう
宣伝美術……………藤井昌浩
企画制作……………ヴィレッチ

あとがき

『星の忍者』―THE STRANGE STAR CHILD―を好評のうちに終え、なんとか先の光明が見えた新感線だが、ちょっと気を許すとすぐに無茶をやる。

それから二ヶ月後の1986年4月、新感線は一週間で新作二本を週の前半と後半で入れ替えて公演した。

坂本チヲノ作の『こてんばんぐらフイティ』と、『夢見る無法者』がそれだ。
余談になるが、その前の年、4月から12月まで全部で7公演、ほぼ月一のようなペースで芝居をうってお客さんを減らしたというのに、この86年も12月までに結局8公演を行っている。この二本立てや、10日間5本の芝居とダンス集をやった『オールザットギャグ2』という狂気の企画も含めていたので、作品の数で言えば一年間で12本。立派な月一ペースだ。ていうか、これはもう若気の至りではすまない。何物かに取り憑かれてたね、君たちはいや、俺もだけど。それだけのペースをやりながら、いのうえは一年間の休筆宣言をしたりしている。結局、三月からほぼ月一ペースで4本、新作を書いたりしているのだ、自分もどうかしてや、まったく。

みるみる筆は荒れていき、芝居もやっぱ荒れていき、これじゃいかんとまた反省して、半年の準備期間を置いて公演したのが『阿修羅城の謎』の初演だった。まったく前年の反省が生きてないじゃないか。君たち。ていうか、俺も含むけど。何を考えてたんだろ、まったく。

まあ、好意的に解釈すれば、前年と違って、この時は古田新太を中心に、橋本じゅん、栗根まこと、鳳ルミ、吉田ヤスエなど、そのうち新感線を支えることになる役者達が新しく加わって、集団に活気が出たっていうのはあるのだからな。

実際、春の二本立てでも、女優の白石恭子・吉田ヤスエメインの『こてんばんぐらフイティ』と里塚の古田新太・橋本じゅんメインの『夢見る無法者』に分けると、目論見があったりしたのだ。

と、いうか、僕としちゃあ、古田達メインで書けるのが正直嬉しかった。
新感線といえば、やっぱり白石恭子がセンターの劇団だった。その軸をすらすらとどこまで男の話が書けるかが自分に課した課題だったのだが、気にしないでかけるのならば、それは願ってもない機会だった。

『荒野のストレンジャー』というクリント・イーストウッドの映画がある。主人公はイーストウッドいつものボロボロのパンチョにく

わえタバコのカンマンのだが、実はこのカンマンの正体が……と、ちょっと奇妙な味の西部劇だ。イーストウッド自身が監督した『ペイルライダー』というのも、ちょっとそれに近い。以前からモチーフにしたい映画だった。それと『バイオレンスジャック』の黄金都市篇。これらの作品のある種のムードを自分なりに練り直しハードボイルドで奇妙な味の作品にしたかった。
芝居の中の時間経過を一週間にして全七景、七日間を一日ずつ一景ごとにわけたりと、ひょっとしたら、今まで書いた脚本の中で一番凝った作りをしているのがこの『夢見る無法者』かもしれない。

そう。この当時は、翻訳物の冒険小説にはまって、銃とかも好きだった頃だ。
その趣味がト書きとかにあふれ出ている、今読むと空回りしているところもあるのだが、それはそれ、明らかな誤りや不必要な表記以外あえて直しはしなかった。

今でも愛着があるホンだし、その当時は気持ちばかりが先走りしてなかなか舞台上に立ち上がらなかった部分もあるのだが、現在の新感線の指向とはまったく異なるベクトルなので、なかなか再演というわけにはいかないだろう。
正直、今回の三部作で、もう一度世に出すことが出来て一番嬉しいのは、この物語だ。自分の中でも、かなり特殊な位置にある作品なんだと思う。

『炎のハイバーステップ』『星の忍者』―THE STRANGE STAR CHILD―『夢見る無法者』という、この三冊を初期三部作と暫定的に言うておくけど、とにかくにもこんなミニマムな作品が出せたのも演劇ぶっく社の決断と、常に書き手に刺激を与えてくれた劇団☆新感線という集団のおかげです。彼らがいなかったら、芝居書き続けるかどうかかわからないもんなあ。
そして何より、こんなに初期の作品を読んで下さったみなさんに感謝します。

では、また。